愛知用水と不老会　目次

カラー口絵　3

本書の刊行によせて　不老会創立四十周年記念事業推進委員会　委員長　竹内　弘　20

まえがき　編著者　浜島辰雄　22

第一章　知多農民の悲願　32

1　旱魃の怖さにおののく　32

2　戦前の用水運動　34

3　終戦前後の大旱魃　37

4　木曽川疏水計画に立ち上がる　45

5　同志への働きかけ　53

第二章　尾張富士　山上の誓い　62

1　〝同じことを考えている人がいた！〟　62
2　用水路の実地踏査　66
3　「愛知用水」と命名　72
4　木曽川上流取水点の決定　74
5　「愛知用水概要図」の作成　77
6　農村同志会の用水運動初会合　80
7　愛知用水取水点の見学会　82
8　農林省開拓局長との特別会談　85
9　知多郡町村会での用水建設期成会設立　86
10　市町村学区説明会の実施（昭和二十三年九月～十月）　89

第三章　久野庄太郎の半生（久野庄太郎自伝より）　92

第四章　奇縁が結ぶ陳情活動　148

1　木曽川下流取水用水組合への説明会（昭和二十三年九月）　148
2　研農会員への報告会　151
3　愛知用水建設期成会の設立　153

4　関係知多郡外市町村に対する陳情と説明　153
5　愛知用水第一回東京陳情　156

第五章　運動の拡大　164
1　三河にも運動を拡げる　164
2　「木曽川総合開発計画の一翼としての愛知用水計画趣意書、同付図」作成、陳情に利用　167
3　農林省開拓局の第一回現地調査　174

第六章　知多臨海工業コンビナート構想　179
1　臨海工業コンビナート誘致を考える　179
2　愛知用水実験農場の設立　184
3　稲の減水深調査（稲の水の必要量、昭和二十四年四月十日）　185
4　名古屋港管理組合の埋め立て計画を聞く　185
5　愛知用水計画の再検討　187

第七章　高松宮、髯の両大人の流域視察　189
1　髯の両大人　189

2　二つの審議会と東大東畑教授の視察　193
3　森信蔵半田市長、世銀に橋渡し　194
4　高松宮の愛知用水地域御視察　194

第八章　愛知用水土地改良区の設立　204
〈コラム〉年末御鏡餅奉呈運動（昭和二十五年十二月～）　213

第九章　愛知用水土地改良区理事長の衆院選出馬　216

第十章　農業受益を考える　224
1　相次ぐ視察団　224
2　気運高まる　226
3　農業受益に関する計画試案（浜島辰雄案）　230

第十一章　着工への足どり　234
1　愛知用水公団の設立　234
2　受益者農民の同意　237
3　愛知用水主ダムの変遷　241

4　愛知用水着工促進陳情書提出　243

第十二章　用水運動を支える　247

1　会社設立　247
2　愛知農林物産の用水運動への協力　249
3　会社の倒産　250
4　失意から再起へ　254

第十三章　新しい門出　268

1　三祐株式会社の設立　268
2　愛知用水模範農場の計画　271
3　愛知用水幹線水路の案内　272
4　愛知用水公団となって計画の変わったこと　274
5　吉田前総理に御礼と報告に参上　276

第十四章　愛知用水着工　280

1　愛知用水着工第一号―三好池　280
2　牧尾ダムの着工　281

3　日本の経済構造の大変革　282
4　愛知臨海工業期成同盟会　283
5　佐布里池の構想　284
6　田植時期分散という発想の根源　287
7　臨海工業地帯、知多西岸に設置　289
8　愛知用水の大恩人　吉田茂先生　296
9　豊川用水に着目—用水建設終了後の心配　302
10　株式会社三祐コンサルタンツの設立　307

第十五章　幹線水路の完工、通水式——310
1　牧尾ダム、用水の幹線工事完工　310
2　兼山取水口での通水式　313
3　豊明村大脇地区の大規模圃場整備計画　318
4　耕地整備事業の実施　321
5　伊勢湾台風と愛知臨海工業コンビナートの形成　322

第十六章　アメリカ視察から学ぶ——324
（昭和四十一年六月十二日より七月六日まで二十五日間）

1　アメリカの開発から何を学んだか　324
2　大規模な冷熱利用に驚く　330
3　社団法人愛知県冷熱利用協会の発足　336
4　海外開発の技術協力　338

第十七章　「不老会」の設立とその発展　343

1　五〇〇体の観音像　343
2　勝沼精蔵先生の助言　352
3　不老会設立総会の開催（昭和三十七年一月二十一日）　355
4　提携の拡大と機関紙「不老」　357
5　財団法人不老会となって　364
6　献体の塔の建立　366
7　不老会の進展　370

・資料編・　374-430

あとがき　財団法人不老会　理事長　小田悦雄　432

急逝を悼む　434

凡例

一、文章の表記は原則として現代かなづかいに統一した。

一、漢字も原則として新漢字（新書体）を用いるようつとめたが、人名の表記（重要な人物などは旧書体で表記するようつとめた）などに多少のバラツキがあることをご了承いただきたい。

一、編著者が高齢であり、また、かつて不老会の会報『不老』の「不老漫録」欄掲載の久野庄太郎さん執筆原稿の代筆をある時期からしていたこともあって（久野さんの最晩年のこと）、自他の原稿が入り混じっている可能性がある。お許しを乞う。

一、本書に登場する人名に関しては、二、三の例外を除いて敬称を省いた。「久野さん」「庄太郎さん」と親しく日々呼び合ってきた人の名を他人行儀に呼び捨てにはできない。大恩ある山崎延吉先生、石黒忠篤先生などについてもそうである。